中学校二年の部　佳作

対象作品／百田尚樹著『夏の騎士』新潮社

「勇気の剣を手に入れるために」

弘前大学教育学部附属中学校　赤石　三奈美

あの夏、ぼくは勇気を手に入れた。

これは『夏の騎士』という本の帯に書いてある一文だ。私はこの一文にとても心を惹かれた。なぜなら、私には勇気がないからだ。この本を読めば私も勇気を手に入れて、今の弱い自分を変えることができるのではないか、と思いこの本を読むことにした。そして書き出しの一文を読み、一瞬でこの物語に引き込まれていった。

勇気―それは人生を切り拓く剣だ。主人公は、一体どんなふうに人生を切り拓いていったのか、早く知りたいと思いながら読み進めた。

この本は、弱虫で臆病な主人公の宏志が六年生の夏に、友人の陽介、健太と共に騎士団を結成し、様々なことに挑戦、奮闘しながら勇気を手に入れていく物語だ。

宏志が最初に勇気を出して行動したのは、陽介や健太に声をかけ、騎士団を結成した時だ。クラスメイトたちに騎士団のことを馬鹿にされ、宏志は逃げ出そうとしたが、自分と同じ臆病者だと思っていた陽介と健太の勇気を目の当たりにし、自分も勇気を出してクラスメイトに言い返したのだ。その勇気をきっかけに、宏志は騎士団の仲間と苦手な勉強に取り組んだり、困っている人を助けたり、様々なことを乗り越えどんどん成長していく。

もし私が宏志だったら、笑われた時点ですぐに諦め、騎士団を解散してしまうだろう。それ以前に、「自分には出来るわけがない。」と最初から決めつけて、騎士団を結成すらしていないと思う。

例えば学級役員を決める時、私はやってみたい係があっても、「上手く出来ず馬鹿にされたらどうしよう。自分には無理だろう。」ということばかり考えてしまい、いつも手を挙げられないまま別の人に決まってしまう。クラスメイトや友だちが勇気を出して挑戦しているのを見ても、宏志のように勇気を出すことができず、友だちや親の前では悔しがって見せるが、内心では他の人に決まってホッとしてしているのだ。

こんな風に私はいつも失敗を恐れ、やる前に諦めてしまうことが多いので、最初は臆病な宏志と私は似ていると思っていた。でも、勇気を出して行動し、段々成長していく宏志の姿がとても羨ましく思えてきた。

大人になった宏志は、「人はみな勇気の種を持っている。それを大きな木に育てるのはその人自身だ。」と言っている。その言葉は、私の両親がいつも言っている「やるのは自分なんだよ。」という言葉と同じだなと思った。両親は私が悩んだり前に進めずにいる時、いろいろアドバイスをしてくれる。せっかく私の勇気の種を大きくするきっかけを作ってくれているのに、私は言い訳ばかりして、なかなか行動することができずにいる。でも、弱い自分を変えることができるのは、やはり自分しかいないのだ、と改めて感じた。もし、今までほんの少し勇気を出して行動することができていたら、私の勇気の種は、どれくらい大きくなっていたのだろうか。とてももったいないことをしてきたなと、急に不安になってしまった。でも、両親は今からでも大丈夫と言ってくれたので、これからは失敗を恐れず、勇気を出していろいろなことに挑戦してみたいと思う。そして、自分の中の勇気の種を成長させて、その成長した勇気を、人生を切り拓くための剣にしたい。もし、今までのように弱い自分が邪魔をしたらこの本のことを思い出して、大人になってから後悔することがないよう、勇気を出して頑張ってみようと思う。